

上島の文芸

水曜会【弓削】

初生りの西瓜のおすそ分け受くる

咲き初めし萩を嬉しく見てをりぬ

遊び足らざる子に秋の入日かな

風に揺れゆれてカンナの色放つ

屋根に花たつぷり付けて牽牛花けんぎゅうか（朝顔）

子の遊び道具揃へも盆用意

いつとなく蝉しぐれ聞けなくなりし

亀島 一美

小林しぐれ

田坂 紫苑

田坂美代子

中本砂恵子

畑 弓道

森本 恵子

生名短歌会【生名】

短歌うた作る心枯れたる八月じん尽庭草に虫のかすかなる

おはようと朝一番の妻の声夕べの愚痴はどこへ行

秋の気配す 熱帯夜そぞろ鳴く虫の声聞けばすくわれたるごと

日照り続き吐息の満つる草庭に黒揚羽蝶姿を見せ

容赦なくどどんと部屋に入り込む打ち上げ花火よ

毎日の日照りに庭も渴き果て餌・水おきて小鳥待

ちおり

村上 宗子

村上市 司

渡辺スズ子

池本 滝子

浜田伊勢子

増成 君子

むつみ歌会【岩城】

家の横おんなの人の睡み声どうやら犬と話しいるらし

池田 友幸

店先に赤き鼻緒の下駄並ぶ盆の近づく島の履物屋

宮本佳世子

国のため産業戦士となるわれに行くなと止めし母

浪本 綾子

寝ねかてに夜々縫りるる扇風機猛暑の果つる日の

池田 繁雄

早く来よ

森本 和佳

熱きシャワー浴びて全身リフレッシュ猛暑をしの

森本サダ子

ぐ術オウのひとつに

白石 勇

球児らの夏の最中さなかの甲子園一打一打に汗のとびち

高本 久子

る

西本 優子

舗装路の隙間に雑草生ひ茂り生命力の逞しき思ふ

高本 久子

うみがめの浜にマンドリン演奏す産卵の様想ひ起

三上 運

せり

大船 近義

この夏を甥は燃えたり高校の最後を飾る俳句甲子

佐伯 真柳

園

近義

江ノ島の磯に百合咲きアイゴ（藍子）来る

近義

暑さ退く気配も見せぬ日の続き

近義

魚島俳歌柳会【魚島】

新涼の演歌に若さよみがえり

長き夜の火曜日ロードショー（楽しかり）

まだ若い証あかしぞボランテア（励む）

呆け防止にと我が老いの日記帳

冬は夏 夏は冬待ち焦るいま

ステテコがわが家におけるクールビズ

俳句甲子園に元氣我が母校
島一つにテンテコ踊り励むかな

城山 太郎
柳 小福

処暑の島結ぶ橋下の潮青し
携帯の無くて動けぬ小旅行

松原 瑞峰

第13回俳句甲子園

全国高等学校俳句選手権大会

《個人の部・カネシロ賞》

◎螢火に孤独つのりて眠り込む

弓削高等学校 藤田 悠希

上島町文化講演会

平成22年上島町文化講演会を次のとおり開催
します。今年NHK大河ドラマ「新選組！」
や、連続テレビ小説「ちりとてちん」、生活笑
百科などでおなじみの桂吉弥さんをお招きしま
す。古典落語のおもしろさを間近で感じてくだ
さい。

■日時 10月31日(日) 14時10分

■会場 せとうち交流館

■チケット 500円

《各地区公民館・教育委員会及びせとうち交流
館にて販売（10月1日より販売開始）》

■問合せ先

上島町教育委員会社会

教育係

TEL 0897-7712128



かみじま歴史探訪

郷土の先輩たちシリーズ⑧

女傑一代 麻生イトの生涯

生名島の立石山には、子安観音さまが祭られています。建造記念碑の碑文は次のようです。

「当山の中腹に古来天然の岩窟あり、天保年間、当時の特(篤)志者、子安観音像を建立…然るに、土生町の特(篤)信家麻生以登女…大正十四年四月工事起こし、村民の有志を補ひ、参道の開拓、堂工事の建立成る…昭和三年七月」

園内の大きな池の側には、別の石碑があり、正面には、大きく「三秀園」、その下に尊堂と。尾崎行雄の揮毫です。その裏面には、「愛媛県知事市村慶三閣下、昭和四年…賞此地風光、名三秀園、蓋(けだし)芸・備・予三州相望、平潮叢巖…穆菴誌」と。現広島県の安芸の国の生口島と備後の因島に伊予の三州(秀)が連なつて、見事だと激賞しているのです。「穆菴」は、一行に参加していた元生名小学校長(当時、現尾道市土生町助役)村上証次の号です。

この立石公園(三秀園)を造成、その一隅の別荘で晩年を過ごしたのが麻生イト。壮年期に活躍したのは対岸の因島。大阪鉄工所(日立造船の前身)への人材派遣業等を取り仕切った男装の女親分。今東光が週刊朝日に昭和三十五年から翌年にかけて連載した『悪名』にも実名で登場。間もな



麻生 イト
(昭和初期の写真)

イトは、明治九年七月三日、尾道本土の商家、麻生林平衛と母ヒデの三女として誕生。成人すると、しばらく阪神方面で生活。明治の末年から大正期に、造船業で繁栄していた因島で、麻生組を起こして、廃船の解体業に従事。人材派遣業にも進出。また麻生旅館を経営、大阪鉄工所の城山クラブの責任者ともなりました。麻生組のハッピの背中には、「イト」という文字が丸く凹状に十個、その中央に大きく「鐵」の一字があざやかでした。

麻生旅館には、文筆家の宿泊客も多かった。俳人の河東碧梧桐は、彼女の姿を『山を水を人を』(日本公論社、昭和八年刊)に巧みに紹介しています。「前額から後頭部へかけて、一文字に深い刀疵(きず)が…髪をジャン切りにして、筒袖に兵児帯。五尺にも足りない小柄ながら、少々四角ばつた顔のイカツイ格好にそぐう眼に威力が…すぐそこに見える生名島に、わしは観音様を祀つた。山の上はエ、眺め、この辺で一等やせ…最初は生名は伊予の島、わしは尾道生まれで、国が違う。よその国の為にする

こともと思つたが、イヤイヤ、伊予も広島もない、やっぱり天子様の日本の島じゃ思うての…ぞんざいな関西べらんめいの話しぶりにも耳をかしげる魅力がある。女史には婚さんがなくて、若い嫁さんがあ

る、というような口さがない世間の陰口はどうでもいい。因島の名物でなくて、広島県イヤ関西随一の名物婆さん…其のジャン斬り頭に栄光あれ…」碧梧桐の『山を水を人を』は昭和八年刊です。その前年、昭和七年六月二十六日に、彼が隣島、弓削島の弓削商船学校を訪問したことが、同校(現弓削商船高専)の『六十年史』の略年表に見られます。麻生旅館への投宿はこの際のことかも。

彼女の額の傷の由来は、中国新聞(大正六年一月十六日)の「女俠客殺し(未遂)―約束を実行せぬとて―加害者は電気職工」に詳細。当時、麻生旅館に勤めていた夫妻の娘(久野大正九年生まれ)は、母からその波紋を語り伝えていきます。「事件現場に居合わせたイトの婿養子の彦さんは、驚いて対応が不十分で間もなく離婚となった。」尾道で少女時代を送り、因島に来たことがあったらしい林芙美子も短編作品『小さい花』に「髪を男のように短く刈り

上げ、筒袖の粋な着物に角帯を締めて、その帯には煙草入れ…」と記述している。

間もなく、日本は太平洋戦争に突入。因島の造船所には、勤労働員で多数の学徒が配置された。当時、旧制中学生であった亀田良一、前尾道市長は次のように語っている。「学徒動員され、三秀園付近の日本水産の船員寮から通勤していた。イトさんと顔見知りとなり、蜜柑や柿などのご馳走になった。当時は、彼女のことは何も知らず、いつも白装束姿なので、宗教関係の方かと思つていた。戦後、映画の『悪名』を見て、初めてイトさんだと気づいた。」(『山陽日日新聞』、平成十八年二月二十三日)

彼女は、昭和三十一年七月二十日に三秀園で歿。その生涯を見送つたのは、俳人の河東碧梧桐が「若い嫁さん」と記した美貌の女性、宮岡ミツノ。三秀園での記念写真(昭和二年撮影)には、イトの側にミツノの姪、三阪照子や当時、全日本海員組合長であった生名出身の濱田国太郎のユカタ姿も。(『女傑一代―麻生イトの生涯』記念事業世話人会発行より)



中央男性：濱田国太郎 右端：イト
(昭和2年8月三秀園にて)

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授

村上 貢 稿